

「農業と国土」を長らく執筆いただいたNPO生物多様性農業支援センターの原耕造理事長が8月4日、自宅で心臓の急性大動脈解離のため68歳で永眠されました。前回号が本紙最後の原稿になりました。氏の心に思いをはせ、哀悼の意を表するとともに心よりご冥福をお祈りします。

(ルートプレス編集部)

追悼 原耕造氏

人懐っこい笑顔を絶やさぬ優しい人柄で、いつも生きることとは、平和とは、など人間の根源を考えている哲学者タイプの方だった。本紙最後の原稿は「大嘗祭の意味」。勤労感謝の日は本来「新嘗

祭さい」で、一年の米の収穫を祝い感謝する神事。皇室行事(宮中祭祀)で大嘗祭は新天皇が即位した年の新嘗祭だ。大嘗祭を来年に控え、改めて農業を見つめ直した原稿だった。

戦後の食糧難を経験した世代の氏は、食料自給率の低下は国の根幹に関わると嘆き、農業の衰退を憂えて警鐘を鳴らし続けた。豊葦原瑞穂の国と美称される国土に生まれ瑞穂に育まれた国民として、歴史の意義を持つ天皇の儀式に際し「日本人の心とは何か」を考える好機だと指摘。減反政策も廃止されアメリカが離脱したTPPも日本主導で動



原耕造氏



親子一緒に真剣な田んぼの生きもの調査(2009年6月、神奈川県西湘で)

き始めた今、大嘗祭の意味を考え農業政策再考の機会にしつてほしいと願っていた。農業は国の安全保障の根幹だとして食糧問題を論じ続けた。立派な軍備を整えても食糧補給が途絶えた軍隊は勝てない。先の大戦でも兵士の死亡の大半が餓死。海外が戦場となる集団的自衛戦争では食糧問題が勝敗を左右すると話していた。

朝鮮半島有事の際は自衛隊の食糧確保とともに、半島からの難民の食糧確保が大問題。ドイツは難民を80万人受け入れているが日本では何人になるか不明。災害対策同様、に想定しなければ対策は立たず、経済封鎖を忘れてならぬという。石油などエネルギーだけでなく、島国では食糧が一番切実と訴えていた。

日本はスイスのような農地の有事対応の議論はない。40万畝の耕作放棄地の議論も地域環境保全を前提とした農業のあり方にも、国民的議論が無いと憂えていた。スイスは1980年代から農家へ直接支払い政策を展開。国民の命を守る基本として、飢えないために農地を保全する農家に「国防費」として支払っている。直接支払いは農業保護政策の一環で、92年のガットウルグアイラウンド以降、世界の国々が実施している。

関税を下げればどの国の農家も苦しい。同ラウンドは「環境に優しい農業をすれば税金で農家に所得補償(直接支払い)しても貿易自由化違反ではない」とし、農産物の市場開放の一方「緑の政策」への転換を促した。各国はこの転換を機に「農業と環境」をセットにした政策に切り替え、農家を直接支援した。

氏は「実践」の人だった。自身が住む地域で10年以上、災害を想定して炊き出し食事を隔月で実施。家庭の防災保存食に玄米の在庫備蓄を勧め、生ごみを回収して発酵させ農地に入れて野菜を作り、防災備蓄とごみ処理の課題解決に取り組んできた。

親を保全し稲作農家が耕作し続けられる仕組みを模索した。田んぼの生物多様性を高めるため、自然保護運動と農業を結ぶことに力を注いだ。田んぼの生きもの調査をして、全国の農家が集まり、田んぼの保全回復運動が全国に広がるよう率先していた。

公共的機能としての農地はさまざまな公的活動を創造し、住民の暮らしを豊かにする。健康を増進させる農作業、福祉、介護、防災、観光、子

農業と国土

自然保護運動と農業を結ぶ

炊き出し食事会では餅つき大会、生ごみ収穫祭、流しソーメン大会などを実施。釜戸を準備し参加者は1人1合の米と備蓄の食品缶詰を持参、自ら薪を使って炊きあがったご飯を皆で食べた。周辺農地を食料備蓄基地と位置づけ、農家の協力も取り付けた。

「農業と環境はセット」が持論だった。その象徴が「田んぼの生きもの調査」だ。子どもたちと一緒に周辺の農地で動物や植物の生きもの調査

を続けた。調査を全国に展開し、生物多様性の取り組みを基に農業汚染を減らす水田づくりを推進した。調査を通じて消費者に田んぼを意識してもらう努力を続けた。結果、田んぼの生きものは徐々に増え、やがてコウノトリやトキの放鳥に繋がった。しかし、こうした成功に満足してはいけないと訴えた。

氏は、生きもの調査は地域の自然と命を守る「仕事」と言う。調査活動を通じて田ん

ぼを保全し稲作農家が耕作し続けられる仕組みを模索した。田んぼの生物多様性を高めるため、自然保護運動と農業を結ぶことに力を注いだ。田んぼの生きもの調査をして、全国の農家が集まり、田んぼの保全回復運動が全国に広がるよう率先していた。

公共的機能としての農地はさまざまな公的活動を創造し、住民の暮らしを豊かにする。健康を増進させる農作業、福祉、介護、防災、観光、子

育て、教育、環境、文化、地域協働などの可能性を語り、農地を拠点とした地域振興策の議論を推進した。そうした活動の拠点の一つとして「道の駅」を位置付けており、各地の道の駅で講演もした。道の駅は地域住民と都市住民の心を繋ぐ仕事ができる。地域の自然と命を守る「仕事」をする市民が集う場所、それが道の駅であればと願っていた。道の駅が出来ることは沢山あると常々語っており、本紙は氏の志を受け継いでいきたい。

合掌